

「認知症初期集中支援チームに対応する作業療法士のための研修会へ参加して」

大浜第一病院 吉嶺 綾乃

平成24年6月18日に厚生労働省から今後の認知症施策の方向性として、「認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)」が公表されました。この中で、認知症の方に早期に対応する「認知症初期集中支援チーム」の役割が示され、そのチームの中に作業療法士も加わることが明記されました。

今回、「認知症初期集中支援チーム」におけるアセスメントについて、作業療法士協会と全国キャラバン・メイト連絡協議会との共催で行われた「キャラバン・メイト養成研修」と「キャラバン・メイトスキルアップ研修」に参加してきました。

大浜第一病院では、昨年度まで院内での業務のほか、那覇市から委託を受け介護予防事業の認知症予防にも携わっていました。また、日々の業務の中で認知症の診断はないもののMCIの状態の患者様と接することが多々ありますが、本人や家族からは「年のせいだから・・・」と加齢によるもの忘れと勘違いしたり、私自身が認知症に対する知識を十分に説明できず、継続的に医療機関につなぐ事が困難な事もあり、認知症を初期段階で発見していく事の難しさを感じていました。

今回の研修では、認知症の臨床像や周辺症状のほか、「行動観察方式AOS」という評価ツールを学び中核症状ばかりでなく、行動・心理症状に影響された日常生活の様子を本人や家族聞き取りも含めて評価する方法論を学びました。見逃されやすい日常での行動を病巣ごとに分けて記載されており、また、家族にも問診しやすい内容であり、評価ツールとして便利なものだと感じました。

身体状況などの「医療的な視点」、生活状況や生活障害など「生活の視点」をそれぞれ評価し、アセスメントすることは作業療法士が日々の診療の中で行っていることであり、認知症初期集中支援チームに対する作業療法士の役割は大いにあると感じました。

85歳以上の4人に1人は認知症である可能性があるとされています。認知症は早期診断で進行を遅らせることが可能な病気であり、今後オレンジプランに明記されている認知症初期集中支援チームが機能することで、認知症予防または進行を遅らすことができ、地域でその人らしい暮らしを支援できるのではないかと考えます。

現状として、全国的にもモデル事業としてすすめられている段階であり、今後どのように機能していくのかは未定な状況ですが、今回の研修を活かし地域貢献できるよう日々精進していきたいと思えます。